

# 暗然たる世界に差し込む一筋の光

木下 ゆかり

白百合学園高等学校

ロシアによるウクライナ侵攻から早一年。儂くも尊い命が次々に失われ、世界は分断の一途を辿り続けている。両軍合わせて約20万人以上の命が一瞬にして奪われ、一日に100発近くのミサイルが街頭を飛び交う。米欧と中露の対立は一層激化し、核などの殺戮兵器が世界に急拡大する。さらに家族を失い、自宅への銃撃被害により、辛い現実には涙する人、ロシア兵から性暴力を受けた学生、息子を目の前で射殺された母親。ウクライナの街並みはみるみる破壊され、病院、学校、施設がミサイル攻撃の標的となり、罪なき民間人も多く犠牲となる現実。ウクライナ公共放送「ススピーリネ」の記者への取材を見たとき、実際に起きた出来事を涙ぐみながら赤裸々に語る姿は、今でも忘れられない。

私は、今の世界は非常に暗く、悲痛に満ちているものだと捉えていた。だが、その世界と対極に位置する「もう一つの世界」が同じ地球上にあったのだ。その「世界」の扉は、芸術という目に見えない鍵を通して開けられる。「ウクライナ国立バレエ団」。まさに今をときめく名ダンサーを輩出し続ける世界屈指のバレエ団である。いわずもがな侵攻による被害や影響は計り知れず、バレエの練習に励みつつも、空襲警報が鳴ればその都度、地下に避難し、身の安全を確保するという毎日だという。

そのような状況を前に、ある一人の日本人が立ち上がった。ウクライナ国立バレエ新芸術監督・寺田宜弘さんだ。ウクライナにおいて、舞台上上がった子どもたちは、公演直前に警報が鳴り、命の危険と隣り合わせになりながらも、決して負けず、戦争の恐怖やショックを感じさせない圧巻の踊りで観客を魅了し、希望を与えていたという。そんな自身の経験から、寺田さんは戦争に負けない芸術の強さに計り知れない感動を覚えたという。ここから当初、侵攻により延期を続けていた日本公演の開催計画を彼は再開した。選んだ作品は、明るく陽気で、楽しく元気の出る「ドン・キホーテ」。笑顔は消え去り、冷たさが蔓延る今の状況からは、全く想像ができない世界が広がっていたのだ。

ここから互いに支え合い、尊重し合い、苦楽を共にし、人間同士の温もりを感じ合うことが、唯一にして絶対の人間の強さだと私は学んだ。バレエは、互いに尊重し合い、協調性を重んじながら「全体の調和」を意識しないと観客に感動は与えられない。まさに昨今、世界各地の戦争で散見されるような「強さ」とは全く相容れない、人々の協調によって成される美と希望の体現である。

今の世界には、芸術を通して戦争に負けない強さを体現した世界も確かに存在しているのである。表裏一体。この言葉は世界という大きな枠の中に秘められているのではないかと。私自身も幼少期からバレエを習い、数えきれないほどの感動的な公演を観てきた。練習を重ねても、重ねても全く成果が出ず、視界が真っ暗になるほど気分が沈んだこともあった。そんな暗闇に染まった私の心に差し込んだのは、バレエという芸術であった。芸術という一筋の光が辺りを照らしたのである。

今もなお、ウクライナでは極寒の中でも電力供給は乏しく、停電である場所が多い。そのような中で、希望という光が人々を照らし、手を取り合い、この状況を打破しようとする未来への道しるべとなってくれるのは、輝きを放つ芸術なのかもしれない。燦然と輝く希望の光は、停電や極寒をも凌駕する光量と温もりが備わっているのである。

世界は分断ではなく、繋がりが合っている。だから、どんなに離れていたとしても、どんなに時間がかかったとしても、私の訴えは必ず伝わる。分断や対立という世界の裏に、芸術という光が、巨大な分断の壁を乗り越える跳躍力があることを信じて。そして一刻も早く、戦争が終わり、世界に真の笑顔が再び帰ってくることを切に願って。

参考文献（最終閲覧 2023.2.12）

- ・【会見全文】寺田宜弘ウクライナ国立バレエ新芸術監督囲み取材レポート  
<https://balletchannel.jp/27636>
- ・【会見全文】キーウから181名が来日！ウクライナ国立バレエ・ウクライナ国立歌劇場来日公演 記者会見&公開ゲネプロレポート  
<https://balletchannel.jp/27603>
- ・産経新聞「芸術の力は戦争よりも強い」ウクライナ国立バレエ団芸術監督、寺田宜弘さんに聞く  
<https://www.sankei.com/article/20230111-HOGH2NN2KVIKRNQCPC3TILYB7M/>
- ・NHKスペシャル 戦火の放送局～ウクライナ記者たちの闘い～  
<https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/blog/bl/pneAjJR3gn/bp/pnVzqGkgjn/>